



年間第 33 主日 (ルカ 21:5-19)

対抗も反論もできない言葉と知恵を胸に

「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」(21・15) 「わたしがあなたがたに授ける」とイエスは言われたのですから、「あなたがた」とは誰なのかを考えてみたいと思います。「わたしがあなたがたに授ける」という言葉は、最終的に私たちにも繋がってくるのでしょうか。

先週、頭ヶ島教会献堂百周年の記念ミサと式典のために上五島に渡りました。直接関連はしませんが、二つの知らせが耳に入りました。一つは、歴代の主任神父様の中で、岩村神父様が見えてなかったのですが、ちょうど同じ日にペースメーカーを埋め込む手術の日と重なったので欠席だったそうです。お祈りしたいと思います。

もう一つは、数日前から容態を悪くしていたお告げのマリアの藤澤ハルエシスターが亡くなって、百周年記念の日の晩に太田尾教会で通夜、翌12日に葬儀ミサを行うという知らせでした。私は日曜日に五島に入って、火曜日に帰りの船を予約していましたが、急遽百周年のミサの日は実家に泊まらず太田尾修道院にシスターの顔を見に行くことにしました。

ただ、どんなに頑張っても通夜の時間に間に合いませんし、次の日の葬儀ミサの時間帯は長崎に留まって定例会に参加する予定でしたので、通夜の晩に、遅い時間でしたが顔だけでも見て帰ろうと思ったのです。今考えると、定例会を欠席することも選択肢だったかも知れません。

とにかく、太田尾修道院のチャペルに横たわっているシスターは、本当にすべてを果たし終えた顔をして眠っていました。紐差からでしょうか、太田尾修道院の立ち上げのために呼ばれていった三人の姉妹たちの一人だったと聞きました。私はこのシスターに太田尾小教区赴任中6年間まるまる賄いさんをしてもらったわけですが、本当にたくさんのお話を教えてもらいました。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」今週のイエスの言葉は、藤澤シスターにきっと当てはまると思いました。

太田尾小教区は、私が生まれて初めて主任司祭になった小教区です。着任して荷物を運び入れてもらいながら、現実にはすぐ直面しました。荷物を搬入するお父さんの一人が、「こんなにたくさん本が必要なのですか？」と言ったのです。それは質問ではなくて、「必要ないでしょうに」という響きでした。そんな人にも、働きで納得してもらおうしかないと思ったのを覚えています。

賄いの藤澤シスターは、私に何かを指摘したり忠告したりはしませんでした。それは6年間同じ姿勢でした。ただ自分が見てきた司祭、自分がお世話になった司祭との思い出を語ってくれて、その中で「あーシスターはこういうことを伝えたいのかな、こうあって欲しいと願っているのかな」そういったことはよく伝わりました。

特別なシスターではありません。高尚な話をするわけでもありませ

ん。けれどもシスターが経験から語る言葉は、「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」を備えていたのです。きっとそれは、シスターに言葉を授けたイエスが、シスターを通して語っておられたのだと思います。しばしばシスターの体験談は、私に慎重な判断とか、迷っていた決断に最終決断を下す貴重な手助けになりました。

イエスは他の箇所でこう言いました。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」（ルカ 10・21）

私は藤澤シスターの最期の姿を見ながら思ったのです。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」は、下手に知識や学問に頼ろうとする人ではなく、素直で神のほかに頼る者を知らない人に授けられるのではないのでしょうか。「わたしがあなたがたに授ける」と言った「あなたがた」とは、イエスのほかに頼る者を知らない人々のことだと思ったのです。

本来、司祭修道者は、「イエスのほかに頼る者を知らない人々」のはずです。ところが中田神父は、まだその境地に達していないのです。自分に頼ろうとするし、最新技術や成功体験に頼ろうとするのです。本来の「イエスのほかに頼るものがない姿」を取り戻せば、飾らなくても人の心を打つことができるでしょう。人に、イエス・キリストを届けることができるでしょう。

2年くらい前に田平教会で開催されたお告げのマリア佐世保地区平戸地区の修養会「四季の静修」が藤澤シスターと会った最後でした。その時シスターから「まあこんなに立派な神父様になって～」と言われたのが最後の会話でした。けれども立派になっていたのはむしろシスターのほうだったと思います。太田尾を出た時よりも小さな体になっていましたが、私が頭が上がらないほど大きな存在になっていました。シスターを乗り越えることは、とうとう最後まで叶いませんでした。

難しい理屈や説明に、神が宿るのではありません。「反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」は、イエスしか頼るものがない人の素朴な言葉に宿るのです。思い返せば私の祖母もそうでした。父方の祖母は鯛ノ浦キリシタン六人斬りの事件を記憶する生存者の家系です。この世のものは何一つ相続しませんでした。永遠の命を保つ信仰と日々の祈りを、祖母から受けたのです。

この世の言葉と知恵は、過ぎ去っていきます。「メガ」という単位が「ギガ」になったのもつかの間、今は「テラ」という単位が身近なものになりました。何一つ、永遠に続くものはありません。これとは違って、イエスが授ける言葉と知恵は、反対者を恥じ入らせ、その言葉は50年後、100年後に人々の口に上るようになるのです。

私は、どんなものを頼りにして生きているのでしょうか。88歳で天国に召されたシスターは、88年間、神様しか頼るもののない生活をして旅立っていきました。